

ココロココロ

第28回

函館港イルミネーション映画祭

第26回シナリオ大賞

準グランプリ

スーパー(の)書店員

平瀬 よしみ





【作者プロフィール】

ひらせ よしみ

1962年北海道生まれ、函館市在住。
函館視力障害センター教官。
受賞歴なし。

【登場人物】

沖 亜希良 (9) 書店アルバイト

森川 祐司 (33) 鍼灸師

富沢 竜大 (33) 鍼灸師・森川の親友

森川 もりかわ 希美 (28) 鍼灸院受付・森川の妹

沖 ひろし (38) 亜希良の父・故人

沖 路子 (58) 小学校教員・亜希良の母

清水 真佐子 (80) 亜希良の祖母

高崎 和博 (39) 書店社員

茶山 隼斗 (32) 書店社員

月島 加奈 (53) 書店パート・主婦

結城 沙世 (37) 書店パート・主婦

飯島 いじま まみ (20) 書店アルバイト・学生
坂杉 さかすぎ 真 まこと (22) 書店アルバイト
菅原 すがわら 春樹 はるき (45) 書店店長
上北 うえきた 隆 たかし (32) 紳士服テナント社員

《書店の客》

男性客 A・B・C・D

女性客 A・B・C・D・E・F

男児、その母親

《その他》

クリスマスファンタジー会場の人々

【あらすじ】

祖母（80）の入院を機に、東京でのOL生活をやめて故郷の函館に戻り、スーパーマーケット内の書店でアルバイトをしている沖亜希良（29）。

亜希良には、本に触れるとその結末が見え、人に触れると自分とその人とのラストシーンが見えるという『妙な力』があり、書店員でありながら本を読む気になれず、恋愛も出来ないでいた。

書店でのアルバイトが1年を過ぎた頃、書籍について質問された事をきっかけに、亜希良は全盲の鍼灸師・森川祐司（33）と知り合う。

以来亜希良は、朝は祖母の相手をする為に病院に行き、昼からは書店で働き、時々夜に鍼灸院で癒やされる、という生活を送るようになるが、森川に『妙な力』が働かないと気づき、初めての事に戸惑う。

祖母の死後、母（58）との会話の中で、亜希良は改めて森川に惹かれていると自覚するが、ラストシーンが見えない森川との『普通の』恋愛に、なかなか踏み切る事ができない。

葛藤の末、森川と自分の物語を読み始めてみようと、心を決め、鍼灸院を

訪れた亜希良だったが、森川の同僚（33）から、森川が患者からのアプローチがもとで治療を打ち切った話を聞き、もうここに来られない……と、治療中に泣きだしてしまう。

しかし、亜希良の告白を聞いた森川は、自らもまた亜希良に『不埒』な思いを抱いていた事を打ち明けるのだった。

「僕の患者をやめて、彼女になるのはどうでしょうか」

クリスマスファンタジーの人ごみの中、睦まじく歩く亜希良と森川。

『いつか本を読みたい』という子どもの頃からの亜希良の夢も、思わぬ形で叶うのだった。

○函館・クリスマスファンタジー会場（夜）

しんしんと降る雪。大きなクリスマスツリー前をにぎやかに行きかう人々。

立ち並ぶ小屋の中、小さなタイルに文字を書こうとする沖ひろし（38）・

沖亜希良（9） 親子。

ひろし「亜希良、何書く？」

ひろし、亜希良の手元を覗き込む。

ひろし「（読み上げる）本・が……」

亜希良、慌てて手元を隠す。

亜希良「見ちゃだめ！」

ひろし「えー、これが集まって大きな壁画になるんだもの、皆に見られちゃうだ

ろ？」

亜希良「知ってるけど、知ってるけど、お

父さんは見ないで！」

ひろし「（笑って）えー、いいじゃない」

亜希良「ダメ！ お父さんのバカ！」

ひろし「えええー？」

亜希良「バーカバーカ！」

ひろし「あっはっは」

亜希良、ひろしに背を向け、ふくれ

っ面で文字を書く。

タイルの文字『本が読めるようになりたい。お父さんのバーカバーカ』

ひろし、首を伸ばして亜希良の手元を見、微笑んでタイルに何事か書く。

ひろし「……じゃ、係のお兄さんのところに持って行こうか」

亜希良「うん」

2人、手をつないで小屋を出る。

○函館の春の風景

函館の街並、遠景に緑浅い函館山。
風に舞う砂ボコリ。

○スーパーマーケット・外観

看板『スーパーハコダテ』

○スーパーハコダテ内・スガワラ書店

天井から下がる『スガワラ書店』の
プレート。軽快なBGMが流れる店
内。

レジ前、エプロン姿の沖亜希良(29)。

亜希良N「スーパーの一角にある書店が、
私の職場だ。スーパーの中にしては大き
いけど、ベストセラー本は2、3冊しか

置いてない、って感じ。アハ、伝わらな
いか」

レジカウンター前、2人の客。

亜希良「ありがとうございました」

1人目の男性客A、黙礼して去る。

次の女性客A、絵本を2冊差し出す。

女性客A「あの、2冊一緒に、リボンかけ

て欲しいんですけど」

亜希良「はい、承知しました」

亜希良、2冊を手早くレジに通す。

亜希良「(大声で) レジお願いしまーす」

エプロン姿の月島加奈(53)、無言で

レジを交代する。

亜希良、作業カウンターに移動しな

がら、女性客Aに声をかける。

亜希良「こちらにどうぞ」

女性客A、亜希良について移動する。

せる。

亜希良N「書店でアルバイトしていながら、

女性客A「やー、かわいい」

私は本を読まない。というのも」

亜希良、微笑んで包みを手提げ袋に

手元の絵本を見る亜希良。

入れ、女性客Aに手渡す。

亜希良N「本に触るとラストが見えちゃう

女性客A「どうもありがとう」

という、妙な力があるから、なんだな」

亜希良「ありがとうございました」

○同・作業カウンター

亜希良、頭を下げる。

亜希良、絵本の金額表示の上に可愛

亜希良N「ほとんどの本は、ラストがわか

らしいシールを貼る。

つちゃうと、全然、読む気になれない。

亜希良「リボンのお色、ご希望は……」

う？」

女性客A「じゃあ、ピンクで」

スーツ姿の高崎和博(39)、作業カウ

亜希良「かしこまりました」

ンターに近づく。

亜希良、2冊を包装紙で包み、濃い

高崎「リボン2本なんて、店長から無駄遣

ピンクと薄いピンクのリボンを二重

いだって叱られちゃうよ？」

にかけ、ダブル蝶結びにして客に見

亜希良「あ、高崎さん。2冊だから、2本

使ってオツケです」

高崎「おー、なるほど」

亜希良N「それでも私が書店を辞めないでいるのは……」

高崎、ニコツと笑い、その場を離れる。

亜希良、笑顔を返しつつ見送る。

亜希良N「うーん、キラースマイル！

……のせいじゃなくってー」

加奈「(きつい口調で) 沖さん、しゃべってないで、レジに戻るか返本に入ったらッ」

亜希良「はいっ。返本行きますっ」

亜希良N「月島さんは、お気に入りの高崎さんには注意しないんですねー、っと」

亜希良、足早にレジ横のバックヤード

出入口に向かう。

○同・バックヤード

亜希良N「私がここを辞めないでいるのは、いつか、私が読める本に出会えるんじゃないか、なんて思っているからなのだ」

本のフィルムかけ作業をする坂杉真

(22)。亜希良、横を通り過ぎる。

亜希良「坂杉君、お疲れさまでーす」

坂杉「お疲……沖さんどこ行くんですか」

亜希良「ニコチン摂取」

坂杉「ちよ、サボる気ですか」

亜希良「秒で返本やるから、見逃して？」

亜希良、歩きながら坂杉をおがむ。

坂杉「(ふくれて) また、もう。早く戻ってくださいよ？」

亜希良、坂杉に片手を振り、バック

ヤードの裏通路に向かう。

亜希良N「妙な力が働くのは、本だけじゃない。もし、彼のかわいいほっぺをツンツンとでもしようものなら、私と彼のラストシーンも見えてしまう」

ンハッピーエンドが見えて、何とか回避しようとして、でも出来なくて、結局そのシーンをリアルに体験する……なんて、何度も繰り返しちゃうと……」

〜フラッシュ〜

カフェ店内。

向かい合って座る亜希良と坂杉。

亜希良「うん。わかった」

坂杉「亜希良さん、ごめんなさい。僕……」

亜希良「坂杉君だけのせいじゃないよ」

涙ぐむ坂杉。

〜フラッシュおわり〜

亜希良N「なーんてね！ 今のはただの想像だけど、初めて手をつないだ瞬間にア

○スーパーハコダテ内・従業員用喫煙所

亜希良、無人の喫煙所に入る。

亜希良N「彼氏なんて作れなくなる」

亜希良、エプロンのポケットから煙草の箱を取り出し、1本くわえ、火をつける。

ワイシャツにネクタイ姿の上北隆(32)、入ってくる。

上北「お疲れ様です」

亜希良「お疲れ様です」

上北、煙草に火をつける。

亜希良N「上北さんは、紳士服テナントの人だ。すつごくかっこいいけど」

亜希良、横目でチラッと上北を見る。

上北の左手薬指の指輪が光る。

〜フラッシュ〜

カフェ店内。

向かい合って座る亜希良と上北。

亜希良「うん。わかった」

上北「亜希良、すまない。俺……」

亜希良「上北さんだけのせいじゃないよ」

〜フラッシュおわり〜

亜希良N「なーんてね！」

亜希良、せわしなく1本吸い終わり、

喫煙所の出入口に移動し、振り返る。

亜希良「お先に失礼します」

上北「(微笑んで) はいー」

亜希良N「くうー、いい笑顔」

亜希良、喫煙所から出、バックヤ-

ドに向かつて歩きつつ、エプロンの

ポケットからマウススプレーを取り

出す。

○スガワラ書店・レジコーナー(夕方)

レジ前に立つ亜希良。後方、スーツ

姿の茶山隼斗(32)。

店内に『夕焼け小焼け』のメロディ。

亜希良N「このメロディで、主婦パートが

終了。かわりに大学生女子が入る」

加奈「お先に失礼します」

結城沙世(37)「お先にー」

亜希良と茶山「お疲れ様です」

沙世、バックヤードに向かう。

加奈、バックヤードに向かいかけ、立ち止まる。

加奈「茶山さん、高崎さんは？ ちょっと

配本の事、聞きたかったんだけど」

茶山「……さあ？ 私で良ければ」

加奈「あっそう。じゃ、明日にします」

加奈、バックヤードに向かう。

茶山「……月島さんって」

亜希良「え？」

茶山「あからさまですよね。高崎さんの事」

亜希良「あー。ですね」

茶山、クツクツと笑う。

亜希良N「茶山さんとも、まあまあ気が合

うんだけど」

○（回想）同・レジコーナー

亜希良、レジ前に立っている。

茶山、あたふたとレジコーナーに来ると、在庫管理端末を操作する。

茶山「（画面を見たまま）あの、沖さん、『オーマイセージ』って本、わかる？」

亜希良「オーマイセージ、ですか」

茶山「お客様から聞かれたんですけど……無いな、外国ものかな？」

レジカウンター前、女性客B、腕を組んでイライラと立っている。

茶山「有名だって言われたんですけど」

亜希良「茶山さん、もしかして、作家の

『大前成二』おまえせいじじゃないんですか？」

茶山「（ピョンと飛び上がって）えっ！」

(回想おわり)

○同・レジコーナー(夕方)

亜希良N「なーんて事がしょっちゅうで」

亜希良、チラッと茶山を見る。

〓フラッシュ〓

カフェ店内。

1人でポツンと椅子に座る茶山。

〓フラッシュおわり〓

亜希良、笑いをこらえる。

エプロン姿の飯島まみ(20)、パタパ

タと駆けてくる。

まみ「茶山さん、沖さん」

茶山「飯島さん、どうしたの」

まみ「あの、今来たら、雑誌のコーナーが」

茶山「え？」

茶山とまみ、雑誌コーナーに向かう。

入れ替わりに、レジかごを下げた女性客C、レジカウンターに婦人雑誌をバンと置く。

亜希良、一瞬、眉を上げる。

女性客C「袋とか、いいわ、そのままで」

亜希良「承知しました」

亜希良、レジを通し、雑誌の裏に店名入りのシールを貼り、手渡す。

亜希良「ありがとうございます」

女性客C、足早に去る。

茶山、あたふたと戻ってくる。

茶山「沖さん、飯島さんと一緒に、雑誌、

やってくれない」

亜希良「はい」

亜希良、雑誌コーナーに向かう。

録があつたら取つていいよ」

まみ「え。(嬉しそうに) はいっ」

○同・雑誌コーナー(夕方)

まみ、立ち読みの女性客D・男性客B・

Cの後ろでウロウロしている。

菅原「どうした」

まみ「店長。(雑誌を差し出して) これ

亜希良「飯島さん？」

まみ「あの、お客様が食品を置いたらしく

って、ドリップで、雑誌が」

亜希良、菅原に黙礼し、乱れた雑誌

の山を整える。

複数の雑誌の表紙、濡れて光つてい
る。

亜希良N「菅原店長は、スガワラ書店系列
の統括専務でもある。複数の支店を回っ
ているので、いない時の方が多い」

亜希良「オツケ。(小声で) んー、さっきの
人かな。(大声で) 失礼します」

菅原「わかった。飯島さん、すぐ返本作業

亜希良、客の間に割つて入り、濡れ

に入つて」

た雑誌を手早く集め、まみに渡す。

まみ「はい」

亜希良「全部返本です。(小声で) 欲しい付

亜希良「(菅原に) レジに戻ります」

菅原「はい、よろしく」

亜希良N「菅原店長は私を信頼してくれて
いるようだ。正社員にならないか、と何
度か言われたけど、時間が自由にならな
いと困るので、お断りした」

亜希良、レジコーナーに向かう。

○同・レジコーナー（夜）

亜希良、レジ前に立っている。

薄茶色のサングラスをかけた森川祐
司（33）、片手を富沢竜大（33）の肩
に置き、もう一方の手に白杖を持ち、
連れ立ってレジカウンター前に立つ。

森川「すみません」

亜希良「はい」

森川「こちら、医学書はありますか？」

亜希良「どういった物をお探しでしょうか」

森川「運動生理学の……」

富沢「まさかよ森川ア、スーパーの中の本
屋だぞ、置いてないべや」

亜希良「（森川に）念のため、お調べします。

少々お待ち頂きますか」

森川「はい、お願いします」

森川、富沢の肩から外した手をカウ
ンターに乗せる。

亜希良、在庫管理端末を操作し、ほ
どなく2人の前に戻る。

亜希良「（森川に）お待たせしました。中
高生向けの物はございますが、専門書は
……」

富沢「（森川に向かい、得意げに）なっ！」

森川「わかりました。わざわざありがとうございます」

ございました」

森川、軽く頭を下げ、カウンターに乗せていた手を富沢の肩に戻す。

亜希良、頭を下げる。

亜希良「申し訳ございませんでした」

2人、歩きます。

富沢「何もここで。通販で買えばいいしょ」

森川「いや、全部フリガナあんのか、とか、

確認したくなつたからさ」

富沢「あつてもなくても、森川は関係ない

べー？ どうせ俺に朗読させんだべや」

森川「富沢だから、ルビが必要なんだろ」

富沢「んまつ、失礼しちゃう」

亜希良、思わずクツと笑い、直後、

ハツとする。

茶山、フロアからレジカウンター内

に入り、亜希良の背後で取り置き書籍の棚のチェックを始める。

亜希良「茶山さん、レジお願いできますか」

茶山「はい」

亜希良、レジ前を離れ、2人の後を

追う。

○書店とスーパーマーケットの境目（夜）

亜希良、森川と富沢に追いつき、背

後から声をかける。

亜希良「お客様」

森川と富沢、立ち止まり、振り返る。

富沢「（森川に）さっきの店員さんだ」

森川「うん」

亜希良「（森川に）あの、ご存知でしたらす

みません、五稜郭書房なら、専門書が置

いてあるかもしれません」

森川「あ、そうですね」

亜希良「少なくとも当店よりは。よく看護学校の学生さんがご利用になる、と聞いた事がありますので」

森川「へえ……。ご親切に、ありがとうございます
ございます」

亜希良「いえ、不確実な情報で申し訳ありませんが、ご参考になれば……」

富沢「はーん、よその店、紹介してくれんだー。店員さん、怒らんない？」

亜希良「(にこやかに)大丈夫です。お客様が告げ口をなさらなければ」

森川と富沢、クスツと笑う。

森川「そうだ。お礼と言つては何ですが」

森川、富沢の肩から手を外し、ポケ

ットから取り出した名刺を差し出す。

森川「片手で失礼。リ्यूズ鍼灸院、森川祐司です」

亜希良、名刺を受け取る。

亜希良「(名刺を見て)しんきゅう……」

森川、にっこり笑う。

森川「はい、ハリです。こわくないですよ。

どうぞ一度、試しにいらしてください」

富沢「足の疲れとか、取っちゃいまーす」

亜希良「それは有り難いですね」

森川「……よろしければ、お名前を」

亜希良「沖、と申します」

森川「沖さん。お待ちしています」

亜希良「はい」

森川「(頭を下げて)では」

亜希良、ペコリと頭を下げる。

森川と富沢、歩きだす。

亜希良、きびすを返す。

富沢「森川ア。なーに、ナンパしてんのよ」

森川「はあ？」

富沢「めんこかったからか」

森川「見えてないって。つかバカ、声で

かい。聞こえるだろ」

亜希良、クスツと笑い、足早に書店

エリアに戻る。

○亜希良自宅（朝）

リビングの片隅、満面の笑みの沖ひ

ろし（53）の写真。写真の前に一口

ようかんと湯呑。

沖路子（58）、リビングから玄関に通

じるドアの前で上着を着る。

亜希良、キッチンの換気扇の下で煙

草を吸っている。

亜希良N「どういうわけか、家族とのラス

トシーンは全く見えない。お父さんの事

も、何もわからなかった」

路子「亜希良ー、今日もお願いねー」

亜希良「んー？」

亜希良、火を消し、路子に近づく。

路子「今日もおばあちゃん、頼むねーって」

亜希良「うんうん、オツケ」

路子「（カバンの中に手を入れ、確認しながら）

昨日はさアー、あんたがすぐ帰った

って文句言ってたわ」

亜希良「いつもと同じ時間だったけど」

路子、手を止め、宙を見る。

路子「入院してから、ちょっと、進んでる

みたいだねえ、おばあちゃん」

亜希良「うん……」

路子「夢と現実がごっちゃになって」

路子、亜希良を見る。

路子「悪いね。わざわざ仕事やめて」

亜希良、首を左右に振る。

亜希良N「祖母が心臓発作で入院して以来、

母は朝晩病院に寄るようになった。でも、

小学校教員の母は、毎朝遅刻し続けるわ

けにもいかなくなつて」

亜希良「いいよ、東京のOLより、本屋の

バイト、気に入ってるし」

路子「でもあんた、本、嫌いなのにね。求

人それしか無かつたからってさ」

亜希良「別に、嫌いじゃないよ」

亜希良N「『妙な力』の事は、家族も知らな

い。子供の頃はうまく言えなかつたから。

今は余計な心配をさせたくないからだ」

路子「あらそーお？　じゃ、学校行くね」

路子、リビングを出ていく。

亜希良「いつてらっしやい」

亜希良、ウーン、と背伸びする。

亜希良「さ、まず病院だ」

○函館老人病院・外観（朝）

看板『函館老人病院』。

○同・病室（朝）

4人部屋。廊下との境のドアは開け
放してある。

清水真佐子（80）、窓際奥のベッドで
半身を起こしている。枕元に名札。

亜希良、部屋に入る。

真佐子、目を見開く。

亜希良「おはようございます」

真佐子「ああ、そうだ。私の着物、持って

数人、もごもごこと返事をする。

きてくれたかい」

真佐子「(微笑んで) 亜希良ちゃん」

亜希良「え？ 着物？」

真佐子、亜希良に手を差し伸べ、亜

真佐子「亜希良ちゃんにあげる約束よね」

希良、真佐子の手を握る。

亜希良「え……そう……だね、ありがとう」

亜希良「おばあちゃん、おはよう。寝巻き

真佐子「(声をひそめて) お母さんに取られ

洗ってきたからね」

ないように気をつけてよ」

亜希良、そつと真佐子の手を離し、

亜希良「(驚いて) えっ、そんな……」

ベッド脇のロッカーに荷物を入れる。

真佐子「(語気強く) 路子は、子供の頃から

真佐子「あー、煙草吸いたい。ね、亜希良

欲張りだったのさ」

ちゃん、持っでんでしょ？ これ」

亜希良「……！」

真佐子、煙草を吸う仕草。

真佐子、急にニコニコする。

亜希良「えーっ、ダメだよ」

真佐子「さ、路子、お金あげようね。好き

真佐子「お酒も煙草もダメなんて、全く」

なジュース買つといで」

亜希良「退院したら、好きなだけ……」

亜希良「路子はお母……うん、ありがとう」

○同・廊下（朝）

亜希良、病室から廊下に出、足取り重く歩き、自動販売機の前で涙をぬぐう。

○スガワラ書店・レジコーナー

亜希良、バックヤード出入口からエプロンをかけながら出てくる。

レジ前に高崎。加奈、その後ろで取り置き書籍の棚を整理している。

亜希良「おはようございます」

高崎「おはようございます」

加奈「（上機嫌で）おはようございます」

高崎「沖さん、今日、絵本担当の結城さんがお休みなので、担当してもらえますか」

亜希良「はい」

子供の声「うわー！」

ガシャーン！ と大きな音。

茶山の声「どうしました？」

亜希良と高崎、絵本コーナーに走る。

○同・絵本コーナー

絵本の回転式タワーラックが倒れ、本とスリップ（短冊）が散乱している。

5歳くらいの男児、その母親、茶山、坂杉、呆然と立っている。

母親「……ここ、ここに乘ったら、倒れて」

茶山「えーっ、乗ったんですか？」

亜希良と高崎、駆けつける。

母親「（男児に）あやまんなさい、お兄さん怒ってるでしょっ、あやまんなさい」

男児「……」

高崎、男児の前に片膝をつく。

高崎「ボク、けがしなかった？」

男児、コクリとうなずく。

高崎、ニコツと笑う。

高崎「良かった。でもね、これ、ご本が乗るものだから、君は乗っちゃだめだよ」

男児、コクリとうなずく。

店員一同、ほうーつと息をつく。

茶山と坂杉、我に返り、タワーを立て直す。

坂杉「壊れては、いないみたいです」

茶山「ですね」

亜希良、足元の絵本を拾い集めながら、一瞬ふらつく。

~~~~フラツシュ~~~~

桃太郎、シンデレラ、人魚姫などのラストシーン、めまぐるしく現れて

は消える。

~~~~フラツシュおわり~~~~

母親「……じゃあ、行きましょ」

母親、男児の手を引き、去る。

坂杉「(呆然と) 謝らなかつた」

高崎、本を拾いながら苦笑する。

高崎「何で倒れないようにしとかないんだ、って、切られるよりマシだよ」

一同、本を拾い、スリッパを挟み直す。

高崎「(絵本を渡しながら) 茶山、破損したら、はじいておいて。あと頼む」

茶山「はい」

高崎、レジに向かう。

亜希良、タワーに本を入れようとして手を止める。

亜希良「茶山さん、これ、なに順で入れるんですか？」

茶山「あー、わかんない」

亜希良「とりあえず五十音順に入れて、明日、結城さんに整理してもらいます？」

茶山「それしかないね。あー嫌だなー、結城さんきつと明日一日中ご機嫌悪いわ」

○同・レジコーナー（翌朝）

レジ前に亜希良、フロアに仏頂面の沙世。

沙世、陳列してある本の表面をハンディモップで雑に払っている。

高崎「（レジ前を通り過ぎながら）おはよう

ございまーす」

亜希良「おはようございませす」

沙世「……」

沙世、無言で頭を下げ、ハンディモップを使いながら遠ざかる。

BGMが止まり、ポーンと店内放送のチャイムが鳴る。

放送の声「はなぞのちよう花園町2丁目の佐藤様、花園町2丁目の佐藤様、婦人服コーナーまでお越しく下さい」

BGM、復活する。

亜希良N「花園町には『丁目』は存在しない。婦人服コーナーに警備員が呼ばれたのだ。多分、万引き対応だろう」

亜希良の背後にある電話が鳴りだす。

亜希良、ピクツとする。

電話のコール、数回。

高崎、飛んできて電話に出る。

高崎「お待たせしました、スガワラ書店で

ございます。……はい？ お待ちください

」

高崎、送話口を手でふさぎ、振り向く。

高崎「沖さん、電話です」

亜希良「(硬い表情で)はい」

亜希良、受話器を受け取ろうとし、

高崎の指に触れる。

~~~~フラッシュ~~~~

高崎、レジ前に立っている。

沙世と加奈、高崎に頭を下げる。

加奈、上機嫌で高崎に何事かを言う。

高崎、ニコツと笑う。

~~~~フラッシュおわり~~~~

亜希良「あ……え？」

高崎「え？」

亜希良「あ、すみません」

亜希良、受話器を受け取り、耳に当

てる。

高崎、亜希良に代わり、レジ前に立つ。

亜希良「……もしもし？」

森川の声「あ、沖さんでしょうか？ 先日

お世話になった森川です。ハリキュウの」

亜希良「(驚いて) ああ、はい、森川様」

森川の声「教えて頂いた五稜郭書房の件で」

亜希良「はい」

森川の声「目的の書籍は無かったのですが、

別のものを買う事ができました」

亜希良「(ホッとして) そうでしたか。少しでもお役に立てて、良かったです」

森川の声「どうもありがとうございます」
亜希良「わざわざお電話まで」

森川の声「ご親切に教えて頂いたので、こちらもちんとご報告したくて」

亜希良「ご丁寧に、ありがとうございます」
森川の声「いえ。……あの」

亜希良「はい？」
森川の声「……あ、いえ、では失礼します」

亜希良「はい、失礼いたします」
亜希良、電話を切り、フーと息をつく。

高崎「(振り返って) クレーム？」

亜希良「いえ。すみません、すぐ出なくて。

病院からかと思つて、ビビっちゃつて」

高崎「ああ、おばあさん。……悪いの？」

亜希良「や、そうでもないんですけど、いっどうなるか、わからないので」

男性客D、レジカウンター前に立つ。
亜希良「いらっしやいませ」

高崎「(向き直り) いらっしやいませ」
高崎、男性客Dの差し出した雑誌を

受け取り、レジを通す。
亜希良、高崎の後方に立ち、やり取

りを見守る。
亜希良N「さっき見えたのは、高崎さんと

のラストシーン？ にしてはおかしい
……」

茶山、レジカウンターに近づく。

茶山「沖さん、返本、入れる？」

亜希良「はい」

茶山「(ニツと笑って) 今日が多いよおー」

亜希良、中に入って来る。

入ってすぐ右手に受付窓口。

フロアに一人掛けソファ数脚。

○スーパーパーハコダテ・従業員通用口(夜)

仕事を終えた従業員たち、次々に通

亜希良「(恐る恐る) コンバンハー……」

用口から出ていく。

受付窓口、ピンクの長白衣を着た森

亜希良、タイムカードをはめ込む。

川希美(28)、身を乗り出す。

亜希良「はあ……疲れた」

希美「こんばんは!」

亜希良、通用口前でバッグを探り、

奥のソファに座っていた紺色の医療

森川の名刺を取り出して見る。

スクラブ姿の富沢、立ち上がる。

亜希良「まだやってる……」

富沢「やー、お待ちしてましたー」

○リ्यूーズ鍼灸院・入口前(夜)

看板の前に立つ亜希良。

富沢「森川森川、沖さん沖さん」

亜希良「リ्यूーズ鍼灸院。完全予約制……」

ケーシー白衣姿の森川、予診室から

待合室に出てくる。サングラスはか

○同・待合室(夜)

けておらず、目は開いている。

森川「こんばんは。ようこそ」

亜希良「よろしくお願ひします」

富沢、ピヨンと飛び上がる。

富沢「ワタシ、まだ名乗ってませんでした

よね、富沢ですうー、(受付窓口を示して)

あつちは希美ちゃん、森川の妹で、昼は

美人OL、夜は美人受付嬢ですう」

希美「こらこら富沢、セクハラ！」

亜希良「(笑いをこらえて) どうも」

森川「(苦笑して) では、まず、患者カード

にご記入をお願いします」

亜希良「はい」

希美、待合室に出て来る。

希美「こちら、お願ひします」

希美、バインダーに挟んだ患者カー

ドとペンを亜希良に渡す。

亜希良「はい」

森川、黙礼して予診室に戻る。

富沢、うやうやしくソファを示す。

亜希良、示されたソファに座り、患

者カードに書き込み、希美に手渡す。

希美「では、少しお待ちください」

亜希良「はい」

希美、受付に戻り、患者カードを見

ながらパソコンに入力する。

富沢、受付窓口に近づく。

富沢「まーだだかい」

希美「うるっさいなーもう。……できた。

ハイ、富沢さん」

富沢、希美から患者カードを受け取

る。

富沢「(亜希良に) じゃあちよつと失礼して、

森川のサポートしてきます」

亜希良「あ、はい……?」

富沢、予診室に入る。

希美、待合室に出てくる。

希美「今、富沢が沖さんの情報を読んで、

森川が点字でメモしています。(ニコツと

笑って) 少しお待ちくださいね」

亜希良「あ、そうか、そうなんですね」

亜希良、つられて微笑む。

ほどなく富沢、待合室に出てくる。

富沢「沖さん、どうぞ」

亜希良「はい」

机の傍らに立つ森川。

森川「おかけください」

亜希良「はい」

亜希良に続き、森川、座る。

森川「(頭を下げて) お越し頂いて、ありが

とうございます」

亜希良「あ、いえ、(頭を下げて) どうも」

森川、手元の点字用紙を触る。

森川「(点字を読みながら) 沖、亜希良さん。

一番のご希望は、リラックスですね」

亜希良「はい。よろしくお願ひします」

森川「鍼はりは初めてという事で」

亜希良「はい」

亜希良、森川の手元をじつと見る。

森川「お酒は少々、煙草も少々」

亜希良「はい」

○同・予診室(夜)

亜希良、富沢と入れ替わりに予診室

に入る。机と、2脚の椅子。

森川、点字を読む手を止める。

森川「煙草……やめようと思われた事は」

亜希良「や……今のところ」

森川「(微笑んで) やめるに越した事はない

のですが、まあ、おいおいに」

亜希良「はい。すいません。……吸うけど」

森川、クスツと笑う。

コンコンコンとノックの音。

森川「はい」

富沢、ドア口から顔だけ見せる。

富沢「森川ア、いきなり鍼だとおつかない

かもしれんから、ちよつともんであげれ

ば」

森川「うん、僕もそう考えていた」

富沢「(亜希良に) 看板は鍼と灸ですけど、

森川はマッサージの免許もあるんでーす」

亜希良「へえ……」

富沢「じゃ、ごゆつくり」

富沢、ウインクしてドアを閉める。

亜希良「へっ？」

森川「え？ どうされました？」

亜希良「いえ、いえ別に」

森川「では、施術室にどうぞ」

森川、立ち上がる。

○同・施術室(夜)

水色のカーテンに半ば囲まれた有孔

ベッド。全面にチョコレート色の大

判タオル、ベッド端にたたんだ白い

フェイスタオル。

森川「服はそのままが良いです。ベッドに

腰かけてください。足をたらしして」

亜希良「はい」

森川、消毒液を手にかけ、両手をこすり合わせながら、亜希良の背後に回る。

森川「まず、ちよつと確認させていただき

ますね。……触ります」

亜希良「はい」

森川、両手で亜希良の頭、首、肩、背中、腰をそつと触っていく。

森川「うん」

亜希良「……あれ？」

森川「(手を止めて) え？」

亜希良「あ、いえ、何でも」

森川「……？」

森川、白いタオルを手に取る。

森川「失礼します」

森川、亜希良の頭からふんわりとタオルをかける。

森川「目を閉じてください」

亜希良「はい」

森川、亜希良の頭をタオル越しに両手で包み込み、数回、ゆつくりと力を入れては抜く。続いて、首、肩、背を順にゆつくりと押す。

森川「はい。目をあけて良いですよ。次は足を診ましよう」

森川、亜希良の前に回り、ひざまずくと、スラックスの上から、膝、ふくらはぎを触り、靴下の上から足首をそつと触る。

亜希良、森川を見下ろす。

森川、つと顔を上げ、にっこり笑う。

森川「ははあ。疲れてますねえ」

亜希良「え、そんな嬉しそうな顔で」

森川「これは失礼。少しもみます」

亜希良「はい」

森川、膝から足首にかけてもむ。

森川「靴を脱いで頂けますか」

亜希良「……あのお、足の裏をギュッって

やって、ギャーッ！ ってなるやつです

か？」

森川、一瞬キョトンとし、吹き出す。

森川「いやいや、違います違います」

亜希良「ですよ、すみません」

亜希良、ホツとして靴を脱ぐ。

森川「テレビとは違いますから、安心して

ください。……脱ぎましたか？」

亜希良「はい」

森川、うつむいて、亜希良の土踏ま

ずをそつと押す。

亜希良「痛くない」

森川「でしょう」

亜希良「っていうか、気持ちいいかも」

森川「それは良かった」

森川、真剣な表情でゆっくりと亜希

良の足をもむ。

森川の指、亜希良の靴下とスラック

スの間に滑り込み、肌直接接触れる。

眉をひそめる亜希良。

亜希良N「やっぱり。さつきも今も、何も

見えない。男の人に触れて何も見えな

ったのは、初めてかも。そういえば、高

崎さんのラストシーンも、何か変だった

……」

森川「……さ、どうですか」

森川、にっこりして立ち上がる。

亜希良、ベッドに腰かけたまま、足を動かす。

亜希良「あ。軽くなったみたいです。(頭に

手をやって) 頭も、何か軽い。すごい」

森川「良かった。今日は、先日のお礼も兼ねて、体験版という事で。料金は結構です」

亜希良「え、でも」

森川「次回からしつかり頂きますので、是非、

リピートなさってください」

亜希良「え、じゃあ……お言葉に甘えて」

森川、微笑む。

亜希良、伺うように森川を見る。

亜希良「あのオ……甘えついでに」

森川「はい？」

亜希良「……その、手を……、ちょっとだけ、触らせて……頂かせても？」

森川「え？」

亜希良「(早口で) いやあの、何というか、感心しちゃって、素晴らしいなー、どんな

手なのかな、見てみたいなー、なんて」

森川「(微笑んで) こんな手で良ければ、どうぞ」

森川、手を差し出す。

亜希良「失礼します」

亜希良、森川の手に触れる。

森川「普通の手でしょう」

亜希良、無言で手を触り続ける。

森川「あの……沖さん？」

亜希良、我に返り、手を離す。

亜希良「あっ、ありがとうございました」

森川「満足されましたか」

亜希良「(ハツとして)あのつ、もしかして

これ、ガッツリ、セクハラでした?」

森川、クスクス笑う。

森川「客観的にはそうかもですね」

亜希良「いやだ私つ、ごめんなさいっ」

森川「訴えないでおきます」

亜希良「いやだホント、すみませんっ」

森川「あつはつは」

笑いが止まらない森川、困り果てる

亜希良。

亜希良「あのつ、お詫びじゃないですけど、

リピートします! 絶対、します」

森川「(笑いなながら)お待ちしています」

青々とした函館山。

函館駅の待合室を埋める観光客。

五稜郭タワーの前を歩きかう人々。

○スガワラ書店・バックヤード(夕方)

返本作業をしている亜希良。

亜希良N「こうして本に触ると、やっぱり

ラストが見える。もしかして、人に触つ

た時だけ見えなくなった可能性もあるけ

れど、試すのはハイリスクだ」

茶山、バックヤードに入ってくる。

茶山「沖さん、また『ハヤブサの城』の間

い合わせが」

亜希良「え、朝から4件目……」

茶山「返本代わります、行ってください」

○函館の夏の風景

亜希良「はい」

○同・作業カウンター前（夕方）

亜希良、女性客Eに頭を下げる。

亜希良「申し訳ございません。他の支店にも問い合わせたのですが、どこも売り切れで」

女性客E「子供の感想文の課題なの、すぐ手に入れないと」

亜希良「文庫本は、どの店も数冊ずつしか」

女性客E「出版社から取ればいいでしょ」

亜希良「お取り寄せとなりますと、函館の場合、最低でも2、3週間……」

女性客E「それはさつきも聞いたけど、もっと早くできないの」

亜希良「申し訳……」

女性客E「いいわもう。ネットで買うから」

女性客E、その場を離れる。

亜希良、深々と頭を下げる。

坂杉、亜希良に近づく。

亜希良「（頭を上げて）……はあ」

坂杉「沖さん、大丈夫ですか？」

亜希良、うなずく。

坂杉「ネットで買えるなら、あんな風になわなくても」

亜希良「しょうがないよ」

坂杉「先生が先に課題図書をまとめ買いし

といてくれたら、ウインウインなのに」

亜希良「でもきつと先生も、通販で買った

やうんじゃない？」

坂杉「あーそっか。あーあ、だからこうい

う書店は給料安いんだよな」

亜希良「そうだね……」

坂杉「ま、そのぶんせいぜい、社割で本を

買わせてもらっちゃおう、っと」

亜希良「アハッ、ちゃっかりだねー」

亜希良、坂杉を見やる。

亜希良N「こんな時、やっぱり本を普通に

読める人がうらやましい。私にもいつか、

楽しく本を読める時がくるのだろうか？」

○リ्यूズ鍼灸院・施術室（夜）

亜希良、ベッドに腰かけている。

森川、亜希良の背後に立ち、後頭部

と首の境目にトントンと鍼を刺す。

森川「今日もお疲れですね」

亜希良「苦笑して）わかります？」

森川、スツと手を引く。

森川「……しばらくこのままで」

亜希良「はい」

亜希良、自分の首の後ろに手を回し、

鍼を触ろうとする。

森川「あ！」

亜希良、ビクツとして手を止める。

亜希良「はっ？」

森川「今、触ろうとしたでしょう」

亜希良「えっ！」

亜希良、手を上げたまま、驚きの表

情で森川を見る。

森川「（にっこり笑って）心の目で見ました」

亜希良「（目をみはって）すごい……」

森川「……ははっ、すみません、嘘です。

初めてそこに刺すと、たいいていの方が触

ろうとなさるので」

亜希良「（がっかりして）なんだあー」

亜希良、手を下ろし、前を向く。

亜希良「森川先生、時々、実は見えているのかなって思います」

森川「少し明るさがわかる程度で……でも、

富沢にもよく言われます。『ねえ見て見て

ー、あっ見えないんだっけ』がお約束」

亜希良、吹き出しかけ、手で口をふさぐ。

森川「中学生くらいまでは、見えていたのですけどね」

亜希良「……じゃあ、中学生くらいまで、

何というか、目で、文字を読んでいた

……」

森川「ええ、そうですね」

亜希良、少し考える。

亜希良「あの、先生は、結末がわかってい
る本でも、読みますか？」

森川「結末？」

亜希良「超ネタバレっていうか」

森川「ああ、なるほど。そうですね、途中
経過を楽しむために読むかな」

亜希良「途中経過……」

森川「まあ、最近は医学書や専門書が多い
ので、結末も何も無いのですが」

森川、次の鍼の準備を始め、ふと手
を止める。

森川「そういえば」

亜希良「はい？」

森川「先日読んだ本に、認知症の方のスキ
ンシップ効果について書いてありました」

亜希良「あ、うちのおばあちゃん……」

森川「ええ。手を握ったり、ハグしてあげ
ると、良い効果があるのだそうです」

亜希良「へええー」

森川「……今度、お見舞いに伺って、軽くマツサージでもしましうか」

亜希良「え、いいんですか？」

森川「沖さんの肩か腕をお借りして歩く事になると思いますが、大丈夫ですか」

亜希良「はい、それは全然、私で良ければ」

森川、微笑んで、鍼の準備を再開する。

森川「さ、ではもう1本。頭のとっぺんに刺しますね」

亜希良「てっぺん？」

森川「それもしばらく、そのまま刺しておきます」

亜希良「あのー、それ、何ていうか……メツチャ恥ずかしいカンジになりませんか？」

森川「大丈夫です、僕には見えません」

亜希良「……え、っとー、それは、笑って

いいやつですか？」

森川「良いやつです。ハイ、どうぞ」

亜希良「(困り果てて) えー……」

森川「あっはっは」

亜希良「自分で笑っちゃってるし」

森川「じゃ、刺しまーす」

森川、鍼をかざす。

亜希良「えーちよっと、待って待って、先生、手、震えてますって！」

森川「はいはい、大丈夫ですよー」

亜希良「ちよ、大丈夫じゃないっしょ！」

森川「プツ……あっはっは」

○同・待合室(夜)

富沢、予診室のドア前10センチの位

置に立っている。

希美、受付から待合室に出る。

希美「え、ちょっと……何してるんですか」

富沢「(振り向いて) やー、なんも聞こえん

もんだね！」

希美「(低い声で) 富沢ア……」

富沢「はん？」

希美、富沢の腹を殴るふりをする。

富沢「ぐっふうー」

富沢、腹を押さえてよろめく。

富沢「だってー、森川が沖さんにセクハラ

しちやいけないと思って、アタシ心配で

ー」

希美、腕を組む。

希美「お兄ちゃんは、そんな事しません！」

富沢、シャンと立ち、真面目な顔つ

きになる。

富沢「わーがってるって。……んでもさ、

俺はさ、セクでもいんでないかと思っ

るんだわ。モチ、沖さん次第だけど」

希美「何ですかセクって」

富沢「ハラじゃないって事だ」

希美「んんー？」

富沢「あのさ、本屋で森川、一目ぼれだっ

たと思うんだわ。やんや違いわ、ひと耳

ぼれつつーの？」

希美「あ。やっぱり？ 私も、そうじゃな

いかと……」

富沢「なっ？ なっ？ やっぱな？ んだ

んだ。(得意げに) フッフーン」

希美「にしても、富沢さんがドヤ顔する理

由が全然わからないんですけど」

富沢「(急にシユンとして) でもなあ、森川

からは……行けないんだべな」

希美「あー……うん。でしようねえ……」

富沢と希美、予診室のドアを見る。

○函館の秋の風景

真つ赤に色づいた香雪園。こうせつえん

産業道路のプラタナスは葉を落とし、

イチヨウが黄色く色づいている。

○函館老人病院・病室(朝)

真佐子、窓際のベッドで半身を起こ

し、ぼんやりとあたりを見回してい

る。

亜希良、亜希良の肘をつかんだサン

グラスの森川、部屋に入ってくる。

亜希良「おはようございます」

真佐子「(嬉しそうに) 亜希良ちゃん」

森川、サングラスを外す。

亜希良と森川、真佐子に近づく。

森川「おはようございます」

真佐子「(キョトンとして) こちらは」

森川「森川と申します。今日は、少しマツ

サージを……」

真佐子、パツと明るい表情になる。

真佐子「亜希良ちゃんの旦那さん？」

亜希良と森川「えっ!」

真佐子「まあまあ、よくいらつしやいました」

亜希良「(慌てて) おばあちゃんたら、あのね」

森川、亜希良の肘を軽く引く。

亜希良、困惑して森川を見る。

森川「(頭を下げながら) 初めまして」

真佐子、ニコニコと笑う。

真佐子の腕をさすっている。

森川「実は私、マッサージをやっているの
ですが」

真佐子「あー、いい気持ち……」

森川「(微笑んで) 良かったです」

真佐子「あん摩さんなの?」

亜希良、窓辺に立ち、2人を見守る。

森川「はい。ちよつと試してみますか?」

真佐子「ありがと、ありがとうねえ……」

真佐子、こつくりとうなずく。

亜希良、ふいに涙がこぼれ、慌てて

真佐子「うん」

ぬぐう。

森川「沖さ……亜希良さん、椅子はありま

真佐子「お目は、全く見えないの?」

すか?」

森川「はい」

亜希良「はっ、ハイッ」

真佐子「まあそう。きれいな目なのにねえ」

○同・廊下(朝)

真佐子「でも、あれだわねえー、亜希良ち

行きかう看護師たち。

やんの可愛い顔が見られないなんて、残

念だわねえー」

○同・病室(朝)

亜希良「(驚いて) はっ?」

森川、ベッドの傍らの丸椅子に座り、

森川、手を止める。

森川「全くもって、残念です」

亜希良「もおおお、おばあちゃんたら、何

言ってるのお！」

森川、にっこりと笑う。

真佐子、キョトンとして2人の顔を

交互に見る。

○スガワラ書店・文庫コーナー（夕方）

亜希良、文庫の平積みから数冊ずつ、

文庫棚最上部の陳列段に置く。

店内、『夕焼け小焼け』のメロディ。

亜希良「これでよし、っと」

亜希良、1歩下がり、陳列段全体を

確認してから、レジコーナーを見る。

高崎、レジ前に立っている。

沙世と加奈、高崎に頭を下げる。

加奈、上機嫌で高崎に何事かを言う。

高崎、ニコツと笑う。

亜希良「あれ……？ このシーン……」

亜希良のエプロンのポケット、携帯

電話のバイブレーション。

亜希良、携帯電話を取り出す。

亜希良「（画面を見て）お母さん」

~~~~暗転~~~~

### ○亜希良自宅・リビング（朝）

部屋の片隅、ひろしの写真の隣に笑

顔の真佐子の写真。写真の前に、ウ

イスキーの小瓶と煙草。

テーブルについていた亜希良、ノロ

ノロと立ち上がり、写真の前に移動

する。

亜希良「おばあちゃん……お酒と煙草、好き  
きだけのめるね」

亜希良、ハーツと息を吐く。

〜〜フラッシュ〜〜

真佐子の病室。

手を取り合って笑う亜希良と真佐子。

〜〜フラッシュおわり〜〜

亜希良N「もし、祖母の死が見えてしまっ  
ていたら、私はきつと耐えられなかった  
だろう。父だって同様だ。あの妙な力が  
家族に効かなくて、本当に良かったと思  
う」

亜希良、自分の肩に触れる。

亜希良「……リ्यूーズ行こうかな……森川

先生と富沢先生、お葬式に来てくれたし、  
そろそろバイト再開しなきゃだし……」

亜希良、写真の真佐子に微笑みかけ  
る。

亜希良「おばあちゃん、覚えてる？ 森川  
先生。とつても優しかったでしょ。アハ、  
全部忘れちゃってるのかな……」

亜希良、涙ぐむ。

亜希良「……参ったなあ」

亜希良、ごしごしと目をこする。

○リ्यूーズ鍼灸院・施術室

亜希良、部屋に入ってくる。

亜希良「こんにちは」

森川、椅子から立ち上がる。

森川「こんにちは。昼の来院は初めてですね」

亜希良「はい。受付が富沢先生で、新鮮でした」

森川、フツと笑う。

森川「落ち着かれましたか」

亜希良「はい、だいぶ。先日はわざわざ、ありがとうございます」

亜希良、深々と頭を下げる。

森川「いいえ。ある意味、僕の患者さんでしたし」

森川、にっこりと笑う。

森川「一瞬、義理の祖母でもあったかな」

亜希良「(慌てて) や、先生、ホントあの時は」

森川「いえいえ」

亜希良「もう、おばあちゃんたら……」

森川「とても嬉しそうでしたね」

亜希良、グツとつまり、涙をこらえる。

森川「……」

亜希良「……あ、の、治療、いいですか。」

そろそろ、書店復帰しないと」

森川「無理はなさらず」

亜希良「(明るい声で) や、祖母の世話がなくなつた分、バリバリ働けるかなー、なんて思ってますから」

森川、何か言いかけてやめる。

森川「……では、ベッドへ」

亜希良「はい」

亜希良、ベッドに腰かける。

森川、亜希良の背後から、頭、首、肩、

背中を順に触る。

森川「(小声で) うーん、背中かな……」

森川、手を止める。

森川「今日は、背中の鍼にチャレンジして

みましようか」

亜希良「はい、そうか、背中は初めてだ」

森川「怖いですか」

亜希良「いえ、お願いします」

森川「では、少々お待ちください」

森川、亜希良から離れ、施術室の壁

際の棚から患者着の上衣じょういを取り、亜

希良のそばに戻る。

森川「これに着替えて頂けますか」

亜希良、森川が差し出した患者着を

受け取る。

森川、ベッド周りのカーテンを引き、

ベッドを完全に囲む。

森川「上だけ、下着も取ってください。背

中のファスナーは閉めなくて結構です。

着替えたら、声をかけてください」

亜希良「はい」

森川、カーテンの外に出、傍らの白

いワゴンに向かう。ワゴン上、消毒

剤ボトル・使い捨て鍼の箱・鍼皿・

アルコールカット綿の入ったガラス

の器。ワゴン下段、廃鍼入れ・クズ

入れ。

亜希良、患者着に着替える。

亜希良「着ました」

森川「はい。入ります」

森川、ワゴンと共にカーテン内に入

る。

森川「うつぶせになってください。ベッド

の穴に、顔を……」

亜希良「はい」

亜希良、うつぶせに寝、ベッドの穴に顔をはめる。

森川、消毒液を手にかけ、両手をこすり合わせながら、亜希良に近づく。

森川「失礼します」

森川、亜希良の背に手を伸ばし、患者着を開くと、背中をそつと触る。

亜希良「（くぐもった声） どうですか？」

森川「お静かに……」

亜希良「う、すびばせん」

森川、手を止め、クスツと笑う。

森川「沖さんの場合、黙っていたら、逆にストレス倍増ですかね」

亜希良「うーん、そうかば」

森川、クスクス笑う。

森川「少しだけ、我慢しててください」

亜希良「はい」

森川、亜希良の背中のところどころを確認するように押さえた後、ワゴン脇に移動し、カット綿と鍼を手に取ると、亜希良の傍らに戻る。

森川「ちよつと、チクツとします……」

森川、亜希良の背を消毒しながら、手際よく鍼を刺していく。

森川「どうでしょう、大丈夫ですか？」

亜希良「……しゃべっていいでふ？」

森川「どうぞ、でも動かないで」

亜希良「はい。全然、痛くないでふ」  
森川「（微笑んで）では、このまま少し、時間置いてみましょうか」

森川、亜希良から離れ、ワゴン下段のクズ入れに廃材を入れる。

森川「少しだけ、我慢しててください」

亜希良「……先生？」

森川「はい」

亜希良「ご道間……、結末がわかっている

本の話、しばしたけど」

森川「ええ」

亜希良「例えばの、話だんですけど」

森川「はい」

亜希良「もし、恋人とお別れする事が、最

初から決まっっていてば……愛せるぼので

しょうか」

森川「え、お別れしないのはナシですか？」

亜希良「だしです」

森川「うーん……そうですね……」

森川、考え込む。

森川「……その時まで、精いっぱい心を尽

くすんじやないかな……。そして、お別

れの後、またもう一度、申し込むかな」

亜希良「……へえー……」

森川「沖さんはどうなんですか？」

亜希良、フツと笑う。

亜希良「私は、終わりがわかっていたら、

きつと愛せたいかば」

森川「……」

亜希良「だから、始められたい」

森川「……」

亜希良「……」

森川、器からカット綿を取り出す。

森川「さ、そろそろ抜きましょう。まだ、

じつとしていてくださいね」

森川、亜希良の傍らに立つ。

森川「少し冷たいです」

森川、亜希良の背の鍼を抜きながら、

カット綿で消毒していく。

森川「はい。終わりました。では、着替え  
てください」

亜希良「はい」

森川、ワゴンと共にカーテン外に出  
る。

少し後、着替え終わった亜希良、カ  
ーテンを開け、外に出る。

亜希良「森川先生、すごいです！ 何か、  
体が軽くなったみたいです」

森川「それは良かったです」

亜希良「(頭を下げて) ありがとうございますま  
した」

森川、微笑む。

亜希良、バッグを取る。

亜希良「……あ」

森川「え？」

亜希良「先生。さっきの話ですけど」

森川「はい」

亜希良「逆なら、どうですか？ お別れも  
何も決まっていなかったら……」

森川「え？ それは、普通の恋愛なのは」

亜希良「あ、そっか」

森川「……？」

亜希良「普通の。……そうですよね」

森川「ええ」

亜希良「……(考え込む)」

森川「沖さん？」

亜希良「あっ、ありがとうございました。

じゃあ先生、また」

森川「また……」

亜希良、部屋を出ていく。

森川「……」

○スガワラ書店・レジコーナー

レジ前に茶山。

亜希良、レジカウンターに近づく。

茶山「あ、沖さん」

亜希良「お疲れ様です」

茶山「大変だったね」

亜希良、無言で頭を下げる。

茶山「今日はまだ、お休みだったよね？」

亜希良「はい。あの、菅原店長来てますか？」

茶山「裏にいると思う」

亜希良「はい、ありがとうございます」

亜希良、バックヤードに向かおうと

する。

茶山「沖さん沖さん。(小声で) 高崎さん辞

めたんだよ」

亜希良「えっ？」

亜希良、レジカウンター前に戻る。

茶山「沖さんと高崎さんがダブルでいなく

て、もう色々、大変だったんだよ」

亜希良「それは申し訳……でも、なんで

……」

茶山「うーん、私ら、給料安いからね」

亜希良「転職ですか？」

茶山「うーん。店長に聞いてみて」

亜希良「はい……？」

亜希良、ペコリと頭を下げ、バック

ヤードに向かう。

○同・バックヤード

亜希良、バックヤードに入る。

菅原、空き段ボールを整理している。

坂杉、本のフィルムかけ作業をしている。  
いる。

坂杉「あ、沖さん」

亜希良、菅原と坂杉に頭を下げる。

菅原、亜希良に近づく。

亜希良「10日間も、申し訳ありませんでした。

今日のご挨拶と、復帰のご相談に」

菅原「そうか。このたびは……」

菅原、きつちりと頭を下げる。

坂杉、慌てて頭を下げる。

亜希良「(頭を下げながら) 弔電とお香典、

ありがとうございます」

菅原「いやいや」

亜希良「今度から、朝イチからのシフトも

可能ですので」

菅原「わかった。よろしく」

亜希良「……あの……(小声で) 茶山さん  
から、高崎さんが辞めたと……」

菅原「いや。クビにした」

亜希良「えっ？」

菅原「シフト変更が困難で、沖さんの代わ  
りに僕が入っていたんだが」

亜希良「あ、すみませんでした」

菅原、手を左右に振る。

菅原「いや、それが幸いした。レジ閉めの時、  
何か高崎の様子がおかしいと思って」

亜希良「……」

菅原「レジミスの処理、あるでしょう」

亜希良「ええ、うっかり通してしまった商  
品を、取り消す」

菅原「うん。何千円か取り消して、レジか

らその額を抜いていた」

亜希良「えっ！」

菅原「小額ずつ、ちよくちよくやっていらしい。僕がいる時にもやるなんて……」

亜希良「……」

菅原、眉をひそめる。

菅原「全く、参ったよ。花園町2丁目の佐藤様をバックヤードに呼んだのは、初めてだった」

亜希良、無言で立ち尽くす。

亜希良N「シヨックすぎて、何をどう考えていいのかわからなかった。一つだけわかったのは、あのシーンはやっぱり私と高崎さんのラストシーンだったという事。私の妙な力は、変わっていかなかったのだ」

## ○函館の冬の風景

函館山、薄く雪が積もっている。

かねもりそうこ金森倉庫群の前行きかう人々。

大きなクリスマスツリーの前、写真を撮る人々。

## ○亜希良自宅・リビング（朝）

亜希良と路子、向かい合って朝食をとっている。

路子「もうおばあちゃんの所、行かなくて

良くなつて……何か、変だね」

亜希良「うん」

路子、手を止める。

路子「何かさ、おばあちゃん、急に変な事言いだすから、つい、叱ったりしてさ」

亜希良「うん」

路子「聞き流せば良かったのにさ。もっと優しく……さあ」

亜希良「大丈夫だよ。おばあちゃん、そんなの全部忘れちゃってるよ」

路子「そうか。……そうだね。そう思う事にするか」

亜希良「うん」

路子、食べかけてまた手を止める。

路子「……あなた、どうするの？ 東京に戻る？」

亜希良「戻らない。ここにいていい？」

路子「いいよ、いいよいいよー」

亜希良、フツと笑う。

亜希良「いいよ多すぎ」

路子「あんたまでいなくなったら、さびしすぎるもん」

亜希良「……」

路子、食事を再開する。

路子「今日、早番？」

亜希良「うん。でも帰り、鍼に行くかも」

路子「鍼って、そんなにいいの？ あたしも行こうかな」

亜希良、手を止め、身を乗り出す。

亜希良「いいんじゃない。疲れが取れるよ。森川先生、すつごく優しいし」

路子「(モグモグしながら) 笑顔は？」

亜希良「へっ？」

路子「(モグモグしながら) 笑顔がいい？」

亜希良「(戸惑って) え……うん」

路子、ゴクンと飲み込む。

路子「好きなの？ あんた」

亜希良「え」

路子「その、森川って先生」

亜希良「(動揺して) え、え、何?」

路子「だってあんた、中学生の時、初めて

のボーイフレンドの時から、笑顔がいい

とかつてさ、言つてたじゃない」

亜希良「えっ、そんなの覚えてない」

路子「あたし覚えてる。まあすぐ別れちゃ

ったようだけど、それからもちよくちよ

く……、あんた、とにかく笑顔に弱いよね」

亜希良「あー、思い当たりすぎるかも」

路子「ま、あたしに似たんだわね」

亜希良「ええ?」

路子、ひろしの写真を手で示す。

路子「あの笑顔がね。良かったんだよねー。

遺伝って怖い」

亜希良、プツと吹き出す。

亜希良「何よもうー、ノロケか」

路子「でも、その先生、全盲なんですよ?

いくら笑顔が良くてまさ」

亜希良、居心地悪そうに身じろぎす

る。

路子「まあ、あんたが本気だつて言うんな

ら止めないけどさ、そうでもないなら、

浅いうちにやめとけば? 絶対苦労する」

亜希良、呆然とする。

亜希良「教師なのに、差別的発言」

路子「そりゃあ、家族となったら話は別だ

よお。娘に苦労はさせたくないもの」

亜希良「……」

路子「(立ち上がって) ごちそうさま。ち

よつとゆっくりしちやった、片づけお願

いー!」

亜希良「うん。……いつてらっしやい」

路子、カバンを手に、バタバタと部屋を出ていく。

亜希良「家族となつたら……って」

玄関ドアが閉まる音。

亜希良、考え込みながら、机上の煙草の箱を手取る。

亜希良「家族か……」

亜希良、ひろしと真佐子の写真をぼんやり見る。

亜希良「家族と森川先生だけ、見えない」

亜希良、目を見開き、煙草の箱を机の上にタン！と置く。

亜希良「家族……」

亜希良、口に手をあてる。

亜希良「家族は……終わらない……」

亜希良、同じ姿勢のまま止まっている。

亜希良「……って、まさか……」

亜希良、胸元に手をあてる。

亜希良「……まさか……ね……」

### ○スガワラ書店・レジコーナー

亜希良、ぼんやりとレジ前に立っている。

女性客F、レジカウンター前に立つ。

女性客F「すみません」

亜希良「あ、はい。いらっしやいませ」

女性客F「この本なんだけど」

女性客F、バッグから本を取り出す。

亜希良「はい」

女性客F「白いページがあっただけど」

亜希良「えっ！ 拝見します」

女性客F、亜希良に本を渡す。

亜希良、本をパラパラとめくる。

途中に3か所ほど、何も印刷されていないページ。

亜希良「少々、お待ちください。（大声で）  
レジお願いしまーす」

亜希良、レジカウンターに近づいてくる沙世を確認し、女性客Fを作業カウンターに誘導する。

### ○同・作業カウンター

亜希良、頭を下げる。

亜希良「大変申し訳ございませんでした。

すぐにお取り換えいたします」

女性客F「交換はいいわ。もう読んじやつ

たし。ミステリだから、最後がわかったら、  
途中はもういらないのよね」

亜希良「え、そんな……」

亜希良、一瞬眉をひそめ、その後ハ  
ツとする。

〜〜フラッシュ〜〜

リ्यूズ鍼灸院、施術室。

亜希良「私は、終わりがわかっていたら、  
きつと愛せたいかば」

森川「……」

亜希良「だから、始められたい」

〜〜フラッシュおわり〜〜

亜希良（小声で）同じだ……」

女性客F「はア？ とにかく、本は返すから、

お金返してもらえない」

亜希良「(我に返って)では、お買い上げの時のレシートを」

女性客F「捨てちゃったわよ。レシート無

いとダメ？」

亜希良「はい……」

女性客F「えー、どうにかならないの？」

沙世、亜希良のそばに来る。

沙世「(小声で) どうしたの？」

亜希良「(小声で) はい、返品のご希望なん

ですが、レシートをお持ちでなくて」

沙世「(小声で) あー。(女性客Fに向かい、

にこやかに) 承知いたしました、こちら

で対応いたしますので、どうぞ」

沙世、本を手に、レジに戻る。

女性客F、沙世について移動する。

## ○同・レジコーナー

沙世、女性客Fにお金を渡し、深々とお辞儀をする。

沙世「ありがとうございます。またお越しください」

亜希良、作業カウンターでお辞儀し、

女性客Fが立ち去るのを見届け、沙

世のそばに行く。

亜希良「結城さん、ありがとうございます」

沙世「いいのいいの」

亜希良「レジミス処理、私やります」

沙世「ああ、さっきのお金はレジからじゃないから」

亜希良「え、そうなんですか」

沙世、レジカウンター下の引き出し

を開け、小さな缶を指す。

沙世「これ。今みたいな時に使えって、店長から言われてるから。どうしてもあるのよねー、こういう事」

亜希良「へえ」

沙世「沖さん知らなかったんだ」

亜希良「はい」

加奈、レジコーナーに来る。

加奈「あらあ。結城さんたら、沖さんに教えてちやつたの？」

沙世「ええ、はい？」

加奈「ダメよおー、よく沖さんとするんでた人、泥棒だったんだから。沖さんだつて危ないかもしれないでしょ？」

亜希良「……！」

亜希良、驚きで言葉が出ない。

沙世「(おずおずと) え、でも、月島さんの方が、高崎さんと……」

加奈、沙世をキッと見る。

加奈「私があんな人と、親しかつたわけないでしょっ」

沙世「え、でも……」

亜希良「(呆然と) そっか……」

加奈「何？」

亜希良「全部、なかつた事に……これも同じだ……」

加奈「はあ？」

亜希良、クスクス笑いだす。

亜希良「おんなじだ……私も」

加奈と沙世、笑う亜希良をじろじろ見る。

加奈「ちよつと、沖さん」

亜希良「あ。すみません。(朗らかに)じゃ、

缶の置き場所、変えておいてください。

返本入ります」

亜希良、頭を下げると、あ然として  
いる2人に背を向け、足早に去る。

### ○スーパーハコダテ内・従業員用喫煙所

亜希良、無人の喫煙所に入り、エプ  
ロンのポケットから煙草の箱を取り  
出し、1本くわえる。

亜希良「……」

亜希良、火をつけ、ゆっくりと2、  
3口吸う。

亜希良「ふー……」

亜希良、手元の煙草をじつと見、長  
いままの煙草を灰皿に落とす。

ジュツ……と火が消える音。

亜希良、灰皿を見つめる。

亜希良N「初めて、ラストが見えない本を  
読み始めてみる、って事だよね……」

### ○リ्यूズ鍼灸院・入口前(夕方)

亜希良、軽やかな足取りで歩いてく  
る。

亜希良、ドアをあける。

### ○同・待合室(夕方)

亜希良、待合室に入り、ホッと息を  
つく。

亜希良「こんばんは」

希美「こんばんは！」

富沢、受付の前に立っている。

富沢「いらつしやーい」

亜希良「こんばんは」

富沢、スツと亜希良の近くに来る。

富沢「今日は少しお待たせするかもです」

亜希良「はい」

富沢「森川、只今精神統一中」

亜希良「どうかなさったんですか」

富沢「(小声で) 他の患者の事は、話しては

いかんのだけど、あれだ、沖さんだから

言つとくわ」

亜希良「……?」

富沢「(小声で) さつき、森川に、ちよつか

いかけてきた患者がいたんだわ」

亜希良「えっ」

富沢「(小声で) この商売、こっちは細心の

注意払って、セクハラ回避すんだけども」

亜希良、うなづく。

富沢「(普通の声で) したけど、患者が勝手に

にその気になる事あんのさ。で、逆セク

ハラ」

亜希良「そんな……」

富沢「あれさ、患者が医者が好きになつち

やう的なやづ」

亜希良「……」

富沢「森川優しいからさー、んでも優しく

すんのが仕事だから。(大声で)で、俺がね、

もう来るな! ってこう、ビシッと」

富沢、空手のような手つきをする。

希美「(受付窓口から) こら富沢ッ、何しや

べつてるッ!」

富沢「キャッ、なんでもありません」

富沢、ピョンと飛び上がり、踊るよ

うに待合室の隅に行く。

亜希良、ストンとソファに座る。

亜希良の目から、ポロンと涙がこぼ

れる。

亜希良「う」

亜希良、ポロポロと涙をこぼす。

### ○同・施術室（夜）

亜希良、ベッドに腰かけている。

森川「うん？ 沖さん？」

森川、亜希良の背後に立ち、タオル

森川、手を止める。

をかけた亜希良の頭や肩を触ってい

亜希良「うー。うー」

る。

森川「沖さん、泣いてます？」

森川「……ん。今日は、なかなかほぐれて

亜希良「ううー。はいー」

くれそうにありませんね」

亜希良、タオルをかぶったまま、コ

亜希良「……そうですか」

クコクうなずく。

森川「何か、辛い事がありましたか？」

森川（静かに）何があつたか、僕に言えま

亜希良「え」

すか？」

森川「僕の勘違いかな」

亜希良「……言えつ、言えなつ」

森川、亜希良の首をそつとささする。

森川「……」

亜希良「……」

森川、手を止めて待つ。

亜希良、泣きじゃくる。

静かな室内。

遠く、ポンポンと花火の音。

森川「あ。クリスマスファンタジーか」

亜希良「……」

森川「しばらく行っていないな……」

亜希良、グスツと鼻をすする。

森川、亜希良から離れ、ティツシユ

の箱を手に戻る。

森川「さ」

亜希良、箱を受け取り、ティツシユ

を数枚取り出し、鼻にあてる。

亜希良「すびばせん……」

ポンポンと花火の音。

森川、再び亜希良の背後に立つ。

森川「今はもう、無いらしいですけど、以

前はタイルの壁画がありましたね」

亜希良「……」

森川「僕、まだ見えていた頃、そのタイル

を見てたんです。そしたら、バーカバー

カって書いてあるタイルが……」

亜希良「えっ！」

亜希良、ティツシユを鼻にあてたま

ま、グルンと振り向く。

森川「え？」

亜希良「えっ？ えっ？」

森川「どう……」

亜希良「先生！」

森川「はいっ？」

亜希良「それ多分、私です……っ！」

森川「え！」

亜希良、前に向き直る。

亜希良「きつと私です。嘘みたい……！」

亜希良、グスツと鼻をすする。

森川「えー、驚いたなあ！ バーカバーカ

森川「字が読めなかった？」

が強烈すぎて、他の事は全く覚えていない、つていう、笑い話をするつもりで

亜希良「いえ、そういう事では……。今も……読めなくて……」

……」

亜希良「ご、ごめんなさい」

森川「うーん？ 録音図書でも良いのなら、聞いてみますか？」

森川「(笑つて) いえいえ」

亜希良「(驚いて) 録音？」

亜希良、ティツシュを鼻から離す。

森川「(微笑んで) はい」

亜希良「……小学生の頃です。本が読みたい、

亜希良「(呆然と) 録音は考えてなかった」

つて書いたんですけど、父が覗き込んでくるのが嫌で、バカつて」

森川「それも読書の一種ですから」  
亜希良「ええ、はい、そうですね」

森川「そうでしたか。残念ながら、お願いの部分は覚えていないなあ」

森川「色々なジャンルがありますし、朗読者の読み方も様々で面白いです」

亜希良、力なく笑う。

亜希良「へえー」

亜希良「私……、ど、どういうわけか……、

森川「富沢の朗読も上手でね。なぜか、そ

本が、読めなくて」

の時だけなまらない」

亜希良、ピクツとする。

亜希良「富沢先生……（泣きだす）うっ」

森川「えっ、うわ、再開しちゃった？」

亜希良「う、うー」

森川、黙って待つ。

亜希良「……わ、私……、もう、ここに来

られない」

森川、一瞬驚く。

森川「（静かに）……どうして？」

亜希良「うう……」

森川「……」

亜希良「……私、ここに来るのが、楽し

くて……」

森川「……うん」

亜希良「森川先生は、体だけじゃなく……

心も、ほわんって、させてくれる……」

森川「……」

亜希良「おばあちゃんの病室、あ、愛があ

ふれてた……」

森川、微笑む。

亜希良「う。う。それで私……でも私」

森川「うん」

亜希良「フラチな、気持ちに……」

森川「ん、んん？」

亜希良「なる時が……あって、私、実はあ

って、ごめんなさい、時、時々です、すみ、

すみません」

森川「いえいえ……」

亜希良「でも、自分で、その気持ち、し、

知らんぷり、してました」

森川「うん……」

亜希良「でも、でも、やっぱり、この気持

ちは……」

森川「……」

亜希良「と、思ったんですけど」

森川「うん？」

亜希良「富沢先生が……、患者が医者を、

好きになっちゃう、的な事が、よく……

森川先生には、あつて」

森川「んん？」

亜希良「そういう患者は、も、森川先生が、

困る、から……だから、だから……」

森川、ため息をつく。

森川「……それで、もう来られないと」

亜希良、コクコクとうなずき、しゃ

くり上げる。

亜希良「そしたら何か、ものすごく、か、

悲しく、悲しくなつ……」

亜希良、ティッシュを箱から何枚も

取り出し、鼻に当てる。

森川「(小声で) 後で富沢、ぶつ飛ばす」

森川、亜希良の背後から両肩にそつ

と手を置く。

森川「よくわかりました。では、今度は僕

の話聞いて頂けますか」

亜希良「はい……」

森川「沖さんと出会った時、僕はとても感

動しました」

亜希良「……？」

森川「ほとんどの店員さんは、富沢と一緒に

にいます、僕が質問しても富沢の方に答

えるのですが……沖さんは違った」

亜希良「そ、そうでしたか……？」

森川「(うなずいて) はい。しっかりと、僕

に話してくださっているのがわかりました」

亜希良「……」

森川「それは恐らく同情などではなく、元々

そういう真摯な方なのだ、という事も」

亜希良「……ありがとう、ごさいます」

亜希良、うつむく。

森川「そのうえ、わざわざ追いかけてきて

くれて……（小声で）あれにはやられた」

森川、少しの間、天井を向いてため

らい、思い切ったように顔を下げる。

森川「僕は、あなたの声や話し方に魅了さ

れてしまった」

亜希良、目を見開く。

森川「（いたずらっぽく）決して、富沢が『め

んこい』と教えてくれたからではありません

せんよ？」

亜希良、思わず笑う。

森川、微笑む。

森川「だから名刺を渡し、電話もしました」

亜希良「え……」

森川「もし、沖さんが自分から来てくだ

さらなかったら、恐らくまたお店に行っ

て営業をかけていたでしょう」

亜希良「……」

森川「僕は、沖さんが独身か、恋人がいる

かなんて、全く考えもしませんでした」

亜希良「……」

森川「とにかくお会いしたくて……会って

話すと、また会いたくなつて」

亜希良「……」

森川「おばあ様のお見舞いまで……」

森川、苦笑する。

森川、首をかしげる。

森川「自分でも、必死すぎか！　と思いましたが。でも、行って良かったのですね」

森川「あれ。間違ってたかな。すみません」

亜希良、コクコクとうなづく。

亜希良「……え、と」

森川「まさに不埒でしょう」

亜希良、グズツと鼻をすする。

2人、しばし無言。

亜希良「それ、は、アリなんですか」

森川「……さ、不埒はお互いさまだという

亜希良「……！」

事がわかったところで」

亜希良、グルンと体ごと振り向き、

森川、亜希良の肩を軽くポンと叩く。

ベッドに正座し、森川と向かい合う。

森川「提案です。沖さんは、今日で僕の患者をやめる」

森川「うわ」

者をやめる」

森川、ホールドアップのポーズ。

亜希良、ビクツとする。

亜希良「先生」

森川「そして、僕の彼女になる」

森川「(ホールドアップのまま) はい」

亜希良「……は？」

亜希良、ティッシュと箱を脇に置く。

森川「……」

亜希良「森川先生」

亜希良「……」

森川「(ホールドアップのまま) はい」

亜希良、頭のタオルを外す。

ですよね？」

亜希良「手を、下げて頂けますか？」

森川、眉を寄せる。

森川「(両手を下げながら) はい」

森川「うーん、1回くらい、良いかもしれ

亜希良、そつと森川の両手をとる。

ませんけど」

亜希良「やっぱり何も……」

亜希良、ゆっくりと森川の両手を自

森川「え？」

分の両頬に当てる。

亜希良「でも、これが『普通』……」

森川、かがんで亜希良に顔を寄せる。

森川「……？」

亜希良「あの、先生？」

亜希良、森川をじつと見る。

森川「はい？」

亜希良「(決然と) 先生。今日で先生の患者、

亜希良「そのかわり、時間制限無しでお願い

やめさせてください」

い出来ますか」

森川「(微笑んで) わかりました」

森川、吹き出す。

亜希良「それで……あの……、森川先生？」

森川「全く、あなたたって人は……」

森川「はい」

亜希良「アハッ」

亜希良、もじもじする。

森川「……沖さん」

亜希良「ベッドの上でキスとか、は、ダメ

亜希良「はい」

森川、亜希良の両頬を手で挟んだまま、にっこり笑う。

森川「やはり、回数制限も無しにしましょう」

亜希良、微笑んで森川の首に両腕を回す。

亜希良N「時には一緒に録音図書を聞いた

り、彼に点字の本を読んでもらう」

亜希良と森川、何事か話して笑う。

亜希良N「本を読みたいという私の夢は、少し形は違うけれど、何十年ごしで叶った事になる」

希美、森川の肩を軽く叩き、耳元で

何事か話す。

森川、笑顔でうなづく。

亜希良N「私が点字を覚えようとしないう事、彼は文句を言うけれど」

富沢と希美、亜希良と森川から離れる。

亜希良、2人に手を振る。

2人、亜希良に手を振り返す。

亜希良と森川、何事か話して笑う。

### ○クリスマスファンタジー会場（夜）

にぎわう人々。雪は降っていない。

大きなツリーがパツと点灯する。

亜希良N「私は、朝から夕方まで、時々夜まで、スーパーマーケットの中の書店で働き、何日かに1回、笑顔がチャームングで視力のない恋人とデートする」

人ごみの中、亜希良と、亜希良の肘

をつかみ白杖を持った森川。

2人の後ろに富沢、ニット帽の希美。

亜希良N「点字を読む指先がセクシーだから……なーんて！ これは彼には内緒の話」

富沢と希美、何事か話して笑う。

富沢、希美のニット帽をスポンと取り、自分の頭にチョコンと乗せる。

希美、頬をふくらませ、富沢の腕にグーパーパンチを食らわす。

亜希良N「私の治療は、彼の親友が引き継いでくれた」

亜希良、チラツと富沢を見る。

亜希良N「もちろん、治療では直接肌を触られるわけだけど、どういうわけか、その人のラストシーンも、全く見えない」

大きな花火が上がり、富沢と希美、同時に空を振り仰ぐ。

亜希良N「(いたずらっぽく) なんでだろうね？」

亜希良、森川と手をつなぐ。

花火に照らされる亜希良と森川の笑顔。

〜回想〜

しんしんと降る雪。大きなクリスマスツリー前をにぎやかに行きかう人々。

タイトル壁画の前、手をつないだひろし(38)・亜希良(9)親子。

ひろし「すごいね、きれいだねえ、亜希良」

亜希良「……」

ひろし「願い事がいっぱいだねえ」

亜希良「……」

ひろし「亜希良あ、亜希良ちゃん、まだ怒ってんの？」

亜希良「(ボソツと) 怒ってない」

ひろし「あっはっは、嘘ばっか」

亜希良、笑顔のひろしをチラッと見る。

ひろし「わかったわかった、後で何でも買ってあげるからさー」

亜希良、パツと顔を輝かせる。

亜希良「ホント？ じゃあ、タイトルのところに売ってた、ピカピカバッジ！」

手をつなぎ、遠ざかる2人。

2人と入れ替わりに、タイトル壁画に歩み寄る森川祐司(13)。

タイトルの文字『娘の願いが叶いますように。byバーカバーカ』

森川「あっはっは、何だこれ！」

富沢竜大(13)「(背後から) おい森川ア、何してんだ？ 行ぐどー？」

森川「おうっ」

森川、振り返り、富沢と共に駆けだす。

キラキラとイルミネーションが輝く道を駆けていく、2人の後ろ姿。

〳〳回想おわり〳〳

おしまい



本電子書籍は、2022年12月2日発行の『第28回函館港イルミネーション映画祭2022 第26回シナリオ大賞・受賞作シナリオ集』より、準グランプリの作品を抜粋したものです。シナリオ集のお求めや、作品の映像化につきましては、本映画祭函館事務局までお問い合わせください。

第28回函館港イルミネーション映画祭2022  
第26回シナリオ大賞 準グランプリ

## スーパー(の)書店員

作：平瀬 よしみ

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

---

2023年2月10日 電子書籍版発行

発行：函館港イルミネーション映画祭実行委員会 函館事務局

〒040-0055 函館市末広町4番19号（函館市地域交流まちづくりセンター内）

電話 0138-22-1037 <http://hakodate-illumina.com/>

制作：株式会社新函館ライブラリ

〒040-0051 函館市弁天町4番8号

電話 0138-84-1620 <http://www.nhakodate.com/>

---